

◀S·E·L·D·A·A▶

No.15

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室気付

平成4年10月26日 発行

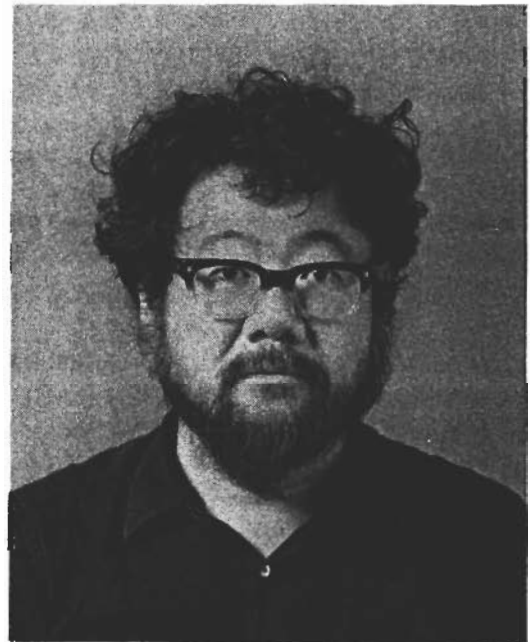
Sophia English Language Department Alumni Association

英語学科長就任にあたって

草深 武

二十年余りも以前、人工衛星による人類初の月旅行にテレビが驚しく快哉を繰り返すその夏の日の午後、私は故野口啓祐先生宅で庭男として百坪余りを所狭しと跋扈する雑草との格闘に余念が無かった。今こうして原稿用紙のます目を埋めている私の頭上彼方の宇宙空間では卵から孵化したオタマジャクシさえ宇宙旅行をしているという。万事が劇的に展開して行く昨今、ワープロにすら手を触れたことの無い私は、井の中の蛙にすらなれず、オタマジャクシ同然、井の端にあちこち鼻面ぶつけては試行錯誤の毎日だった。それがあるまいことか、昨年暮、四月より学科の陣頭に立たざるを得ぬ破目になったのである。程無くして地獄耳の学生連中の中で失笑が起こったそうだ。さもありません。私が彼等だって失笑を禁じ得ないに相違ない。土台、私は人の上に立つような器ではない。長いこと膝下に置いて下さった野口先生がある時感慨深げに「君は入学時は三十七人中三十六番目の成績だったのになあ」とおっしゃられたことがあった。物覚えが遅く呑み込みの悪い私を良くも長いこと耐えて膝下に起き続けて下さったものと、今でも深く感謝している。しかし、学科長職などというものは学んで学べるようなものではない。六ヶ月程やってみて、多年にわたりこの職を自在にこなした続けた野口先生やニッセル先生はいうまでもなく、前任者松尾先生の利器振りも又神の加護無くしては不可能というべきである。試行錯誤の間、八年間にわたって下町学習活動を共にしたハンコック神父の薫陶も空しく、私には未だ信仰というものが芽生えないのであってみれば、加護を願

うは瀆神の極みであろう。難病に倒れられ活動を中止せざるを得なくなり、今猶病魔と闘い続けているそのハンコック師からは回心の機会こそ恵まれなかったものの貴重な英知を授かった。「正直に勝る政策は無し」だ。愚直という点だけを取って野口先生が膝下に置いて下さった様な私には、存外この英知は型紙通り身にぴったりだ。国際政治経済が劇的に変化しており、大学の社会に於る位置づけが問題になっている今、「正直に勝る政策無し」なんぞと正論



一本槍とは呑気なこと、そのうち手遅れになって遣り繰りがつかず、全て遣りっぱなしで職を投げ出すようなことになりやしないかと気遣って下さる向きもあろう。私自身も少々不安ではある。だが、国際政治にせよ経済にせよ、さらには社会それ自体ですから、幸せを求めて営む人間の諸活動の集積に他ならないという根本的事実に立ち返って考えてみれば、日々のわれわれの現実に赤心誠実立ち向かい、そこから一人一人が自分の判断で人間の幸せを把み出すこと以外に意味のある何かがあるだろうか。学生時代に故メイスン師より教わった OUR TOWN のエミリの嘆きは今猶、私の胸中でその痛切さを失っていない。知識なり情報なりが安価なフロッピー・ディスクによって容易に賈われる今日も猶変わらない大学の社会的意義の一つ、それは「人間の幸せを一人一人が誠実に深く追求する能力を身につける場」

というこの根本理念ではあるまいか。社会がなべて営利を優先し、人の気を惹く為に万事が劇的になり、「奇蹟」が新聞紙上を頻繁に振わす余り、「奇蹟」とは神の御業に非ずして人為創作そのものであることが三歳の赤子にすら常識にさえなり兼ねないような「劇的社会」が劇的に将来蔓延する様なことがあるとすれば、それを抑える解毒剤はなんら劇薬とは縁のない、実に大学に於る教職員一人一人、学生一人一人の日々の非劇的で地道な探求活動のうちに見つけられるかもしれない。大向う受けしないそんな退屈な講釈は真平、引っ込み引っ込みと学生諸君や卒業生同志諸氏からの叱声を待つまでも無く、持ち時間が尽きればお後と交替、舞台袖幕の薄暗がりならぬ元の井中に引っ込んで、相も変わらぬ成長のないオタマジャクシの試行錯誤に戻るとするのみである。

SELNET

SELNET 求人募集苦戦中

英語学科同窓会(SELDA)の会員に対する活動の一つとしてこの4月スタートした人材バンクシステム、SELNETはこの原稿締め切り時点(8月15日)で発足4ヶ月間に18名の会員から求職のご応募を頂きましたが、求人の方がわずか5社と、ふるいません。またこれまでにご応募いただいた求職・求人内容にパソコンに入力し、基本的な項目が合致するケースはそれぞれ求人社・求職者にご紹介してきましたが、残念ながらこれまで採用が決定したという報告はSELDAの方に寄せられていません。

現在、日本経済は第二次石油ショック以来の不況と言われ、企業の求人は減る一方で求職者は増加の一途。そんな世情を写しているのかもしれませんが、SELDA 常任委員会もご応募いただいた会員の方々のご要望に少しでもお応えできるよう、今後、活動の活性化を図って行きます。手始めに、以下の点を決めて実行に移しております。

- (1)求職者の登録は、発足時(本年4月)にさかのぼって、採用が決定するまで1年間有効とする(以前は4ヶ月)。
- (2)最初に登録時に、求職者・求人社とも照合条件(検索項目)を従来より減らして、少しでも可能性のあるケースは全て紹介する。
- (3)ソフィアンズ・ナウやコムソフィア(マスコミ・ソフィア会会報)などにも協力を依頼して、英語学科卒業生(SELDA 会員)に対する求人を喚起する。
- (4)ソフィア会や SELDA 会員名簿等により、各業界で活躍する同窓生に、人材募集の折には SELNET を利用してくれるよう、ダイレクト・メールなどで働きかける。

ということで、経済の不況と発足間もない SELNET の知名度不足により苦戦していますが、SELDA としては会員の皆様に対するサービス、存在意義を高める活動の一つとして始めたものですので、今後もこれにめげずに続けて行きますので、皆様、是非ご支援下さい。

求職、求人募集には今後も SELNET をご利用下さるよう、お待ちしております。詳しくは、この会報に同封のチラシをご参照下さい。

(注:なお、一部の会員の方々から、色々な問い合わせが電話でできるよう、SELDA の SELNET 担当係の電話番号を教えて欲しいとのご要望が寄せられましたが、英語学科事務室も SELNET 担当の常任委員も現在ボランティアで運営に参加しており、本来の職務に加えて電話でのお問い合わせにお答えする余力がありませんので、もうしばらくは電話の設置を見合わせることにになりました。今後の推移をみて検討を続ける予定ですので、悪しからずご了承下さい。)

1992年度 BTF 講座春期報告

実社会で活躍している英語学科卒業生の方が講師となり、「英語と社会」というテーマで、英語学科生に講義をするというユニークな授業が始まり、すでに1年を経過しました。

今年も4月から SELDAA の先輩方が講師となり熱の入った内容で授業が繰り広げられています。以下、講師の方々の講義の要約を報告します。

第10回講座（4月24日・5月8日）

くりす
栗栖徳雄氏（昭和42年卒）

モントリオール銀行在日代表・東京支店長

卒業後、アメリカで働いたり修練院で勉強をしたときの経験から、一番自分をだますのは自分であり、自分の敵は自分自身であることや、自分がどこまで白紙の状態でも客観的になれるかが重要であることを学んだと語られた。モントリオール銀行に入行してからは日米の文化の違いに苦勞し、アメリカ人とビジネスをするのに、話をしながら物考えることが重要で、常に彼等と違った方法で自分の存在をアピールすることの大切さに気付いたという。

思い込みのない状態でのコミュニケーションが大切で、cross-cultural な人間がこれからますます必要となってくると力説。

最後に、OA 機器の発達で「情報が民主化」している現在、管理職は部下に必要な情報を与えた上で、責任感と達成感を持たせることが重要になってきていて、この自己責任による達成感が success というものであろうと締めくくられた。



第11回講座（5月15日・22日）

石井紀子氏（昭和57年卒）

ジョージ・ワシントン大学博士課程（ユニットII）在学中

学生時代からの英語との関わり、大学院進学か就職かの選択、就職後の仕事との取組みなどの話の後、ご主人の留学と一緒にプリンストン大学で聴講生として学び始めた時、アメリカの大学から自分の考えを明確にして疑問を持って研究していくという姿勢を学んだという。さらに数年後ご主人の転勤で再渡米し、ジョージ・ワシントン大学の大学院での生活を紹介していただいた。自分で目的意識を持ち、自分で責任を持って研究を進めていくことの厳しさを、さらに莫大な読書量とレポート。しかも学生・妻・母親として一人三役をこなすという状況下で、アメリカの保育事情の苦勞などの話も折り混ぜて話していただいた。

女子学生に限らず、男子学生もアメリカ大学院での研究活動、博士課程の厳しさを、最後におっしゃった言葉「信念」「粘り」「臨機応変」に関心もし、また勇気付けられていた様子だった。



第12回講座（5月29日）

土井真美氏（昭和51年卒）
モスクワ大学日本語講師

在学時代に所属していたオセアニアクラブがきっかけで日本語教育に興味を持ち始め、一年間のオーストラリア遊学中に知り合った筑波大学大学院の教授との出会いから、筑波大学院で日本語教育を専攻。その後の米国国務省日本語研修所、国際協力事業団、産能短期大学などで日本語教育、教師養成などでの活躍の様子を話していただいた。

現在、ビジネス面での日本語教育の需要は高まっているが、日本語教育は、母国語であるがゆえに見落としてしまう要素が多く、ある一定の距離を置いて日本語を見ることが大切であると講義を終えられた。英語を学ぶ学生たちにとっては、まず日本語の重さの認識に立ち戻ることが余儀なくされた講義であった。



第13回講座（6月12日・19日）

くさなぎ
草薙裕氏（昭和35年卒）
筑波大学教授・言語学博士

朝日イブニングニュース時代、またアメリカ・ジョージ・タウン大学留学時代の苦労した経験から、「言葉が通じるだけでは文化は理解できず、本当の理解とは、長い時間をかけて異文化とともに過ごすことで得られる。」と、熟っぽく話された。

ハワイ大学助教授に就任してからも、猛勉強を続け、法学を修得した際には「議事進行に困ったら草薙にきけ」とまでいわれた。今は、学際研究・コンピュータ言語学を専門にしているが、これまでの様々な経験の中から、自分が何をしたいか、また、自分が何に向いているかを考え社会に出て行ってほしいと学生たちに語り、英語学の大先輩としての講義を締めくくられた。



第14回講座（7月3日・10日）

小嶋俊郎氏（昭和59年卒）
㈱西武百貨店渋谷店営業企画部

小学生の頃からその素養があり、大学時代は、このイベント企画精神を発揮して「エンターテイナーズ・ユニオン」というイベントサークルに所属して活動。さらに「クイズ研究会」を結成し、TVに出演したことなどマスコミ界で活躍したことが、自分が社会にいかに通用するかを試す絶好のチャンスであったとの話から始まった。

西武百貨店の企画部で種々の販売企画を手掛け、特にここ数年の「バレンタイン企画」の内容の斬新さをマスコミが大きく取り上げ、大成功を収めることができたことなど、的を得たビジネスのノウハウを次々と披露していただいた。社会で自分が置かれた立場、持ち味を生かして自分自身をプロモートする事の必要性を強調された講義だった。



1992年度 BTF 秋期講座予定

前頁、春期講座に引き続き、10月2日のオリエンテーションの後、次の講師の方が予定されていますので卒業生の皆さんも聴講してみたいかがでしょうか。この講座は、ブラザー・マイケル・ミルワールドが担当しています。

日 時：毎週金曜日 13:30-15:05
教 室：2号館 246号室

10月16・23日	斎藤資晴氏（昭和57年卒） 駿台予備校教師	11月20日	クラス討論
10月30日	飯塚昌治氏（昭和46年卒） J・ウォルター・トンプソン・ジャパン社長兼CEO	11月27日	岡田恵介氏（昭和45年卒） ジャパントイムスウィークリー編集長
11月6日	鈴木薫氏（平成3年卒） NHK 編成局著作権部	12月4・11日	岩崎洋一氏（昭和41年卒） 日本ボラロイド(株)総務人事部長
11月13日	渡辺由美子氏（昭和57年卒） 朝日新聞社国際本部	12月18日	石倉洋子氏（昭和46年卒） 青山学院大学国際政治経済学部助教授
		平成5年1月8日	クラス討論

BTF 講座事務局では、英語学科卒業生で講義をしていただく方の紹介をお待ちしております。事務局まで是非ご一報ください。(TEL: 03-3238-3719)

卒業生便り

ヴァンクーヴァー・ソフィア会の現況

NKK 長谷川幹夫（昭和37年卒）

今年5月当地で開催された環太平洋経済会議（通称PBEC）に日本使節団副団長として出席されたソフィア会会長諸橋三菱商事社長を歓迎する懇親会を、会員22名の参加を得て5月26日举行了。この歓迎会は、当会にとっての一大行事であった。その模様は、帰国後諸橋会長からソフィア会総会に報告された由である。この会をアレンジしたのは、SELDAA旧役員の在晩外英卒メンバー込山雅弘・博子（書記長、日商岩井50及び52年卒）夫妻、野崎直行（副会長、47年卒王子製紙）、長谷川幹夫・真弓（会長、NKK37及び38年卒）夫妻である。

89-90年相前後して赴任した長谷川、佐藤剛志（前副会長、40年卒東銀支店長）込山が相談して、規約、会則を制定し、役員を選任して当会の再構築を計った。その後佐藤はNYに、野崎は東京へそれぞれ栄

転したが、会員40名中12名のSELDAAメンバーが中心と成って当会は、活発に運営されている。

現在当会を支える他のSELDAAメンバーは、ランバートソン（旧坂本）紀子（38年卒）黒子幸雄（43年卒）高橋（旧大谷）昌子（54年卒）稲葉（旧門脇）加代子（58年卒）高田伸（59年卒）田中幸治（62年卒）である。



▲長谷川夫妻

アメリカという 国に住んでみて

坂戸インターナショナル・オーナー
コルバ・坂戸篤美（昭和43年卒）

上智を卒業して早いもので20余年がたとうとしている。日本とアメリカでの在住期間がちょうど半々位になった。アメリカに住めば住む程この国の底の深さを感じさせられる。昔、学生時代にピタウ神父様の政治の講義を熱っぽく聞いたのがついこの間のことのように思われる。先生はアメリカという国、社会の特色を大変わかりやすく説明なさった。あまりにもわかりやすかったので、若い私はついアメリカが分かったような錯覚に陥ったものだ。しかし今振り返ってみればまるで分かっていなかったと反省するばかりである。アメリカの問題や現象の裏には、それが税法、医療制度、財政赤字、果ては麻薬であれ何であれ、根深い社会的要因があり、なかなか外から見ただけでは肌で分かることは難しいと思う。しかし皆が皆異国に長く住むわけにはいかないから、そうなるとお互い白紙の心になって積極的に理解する態度が望まれる。

私は仕事上、常に日米間の文化、言語、習慣の相

上智で学んだこと

J・ウォルター・トンプソン・ジャパン社長兼CEO
飯塚昌治（昭和46年卒）

上智を卒業してから、今年で22年目を迎えます。大学も3つ通ったり、2年病気をしたりと、通常の人3倍近くも長い学生時代を過ごしました。でも、後悔はしていません。多くの友人を得たし、囲碁も覚えたし、何千曲かのクラシック音楽もコンサートホールやレコードで聴いたし、オーケストラの楽譜も何百曲と集めたし、英語も自然に覚えました。J・ウォルター・トンプソンという耳慣れない会社に就職したときは、すでに29歳になっていました。この会社が広告代理店であることも上智の先輩に薦められるまで全く知りませんでした。しかし入社間もなく広告の力の大きさ、企業にとっての役割、消費者にとっての意味など、興味の尽きない題材がたくさんあることに気づき、「あっ」という間に22年が流れました。この会社は「給料3ヶ月分」のダイヤモンド結婚指輪や、スイーテンダイヤモンド、ラックス、ハーゲンダッツ、エッソ、コダック、ノースウェスト航空などの広告を担当している年商300億円ほどの小さな会社ですが、その分家族的で、楽しく、活



違が接触するところに立たされる事が多い。そこでよく感じるのは、テクノロジーや商品は簡単に国境が越えられるのに対し、一番時間がかかるのは人間の頭、心、体だということだ。この頃特に日本から訪米する若い人が、先入観を抱いて訪問し、表面だけ見て帰っていく場合もあるようだ。逆に、私が出会う多くの人々の中でも真に優れた人物は、先入観や偏見が少なく、柔軟的に物事を見る能力に恵まれている人が多いようだ。私にとっては、好奇心の強さも手伝っているが、やはり言語が他文化理解の最大の武器になっていると思う。上智の4年間は本当に重要な種まきの時期であったと思う。



気があふれています。でも自分のこの会社での22年を振り返ったとき、学校時代に勉強したことだけが不思議に今でも自分の体で覚えていることに気づきました。英語学科の学生時代、ニッセル神父さんの言われた事で、今でも心に残っている言葉があります。「教育には、幾らお金をかけてもかけすぎることはありません。」本当だなぁ、と今実感しています。

オーストラリアの空の下から

日下より子 (昭和48年卒)

最近オーストラリアでは国旗のデザイン変更が提案され話題になっています。一案として(冗談ですが)現在のユニオンジャックの部分日本の国旗に変えるというのがあり、思わず笑ってしまいました。これこそ今、この国が直面しているジレンマなのです。国旗から英国色を無くして独立を強調したいという意志に反し、経済的には日本の進出に頼っていることへの焦りと苛立ちが感じられます。

ここまで親密な経済関係を結んでいる国にもかかわらず、「オーストラリア＝コアラ、カンガルー、オペラハウス」というイメージしか持たずに来た私がここで学んだ7項目をご披露します。

- 1 公用語は「エイゴ」なれど、上智で学んだ「エイゴ」とは似て非なるものなり。
- 2 2月から始まる新学期。「秋休み」もある。
- 3 計算機無しでは受けられぬ数学授業。

在校生から先輩たちへ

現在の学科、学生について

向後 剛 (英語学科2年)

入学案内によると、英語学科は「英語を駆使する教養人の育成」を目指しているらしい。そのため、1・2年次に英語を集中的に学び、3・4年次に各々の関心に応じて研究(アメリカ研究、英国、英語文化圏研究、言語、コミュニケーション研究、国際関係研究のいわゆる「4本柱」)を進める体制をとっているというたてまえである。

現在英語学科に身をおいている者の1人として特に感じるのは、英語学科では自由に幅広く学問ができるということである。例えば外国語学部の他の学科の学生は、入学後たいていの人々がまず専門の言語を一から学ばねばならないのに対し、英語学科の場合、先にあげた「4本柱」の研究や、あるいは英語学科に全く関係ないことでも学べる時間がつくりやすい。また、必修の授業は出席にうるさいが、ゼミや卒論は必修ではないことも自由な時間をつくれる要因になっているのだが、このことはむしろ「4年間何もしなかった」という人があらわれる原因にな



▲右端が著者

- 4 南の風吹けば、気温が下がる。
- 5 日本はオーストラリアの唯一戦争加害国。(日本軍の攻撃を実体験している人に会ったのはショック)
- 6 不思議な食べものベジマイト。(イーストから抽出した世にも不思議な味と臭いのオーストラリア版納豆?)
- 7 紳士は半ズボンがお好き。

っているようである。その他、教員と学生の関係が緊密であり、気軽に相談や質問ができるということも英語学科の特徴としてあげられるであろう。

このような学科の特質を生かして、現在の学生は自由に学生生活を送り、勉強をしているように見える。特に女子学生は元気で、全体的に見て、「英語学科(上智)の男は情けない」というのが通説になっている。

私は、現在の英語学科の学生は、語学の習得はコツコツやる以外ないので、少し前に流行した言葉を使えば、英語を地道にパラノ的(偏執的)に勉強しなければならないのであるが、その一方で先に述べた学科の利点を生かし、自分の興味に応じて、柔軟かつ気軽に様々な学問に手を出す、スキゾ的(分裂的)な態度がおもしろいのではないかと思う。実際に来年度からアジア文化研究が副専攻になり、英語学科生の選択の幅はさらに広がるのである。そして、私はこのように多様な選択肢の中で様々な学問と「戯れる」ことから英語学科の意図する「教養人」が生まれるのではないかとも思うのである。

ただ、「スキゾキッズ」の自由を阻害する要因も英語学科にはあり、それをどう脱構築(deconstruction)していくかがこれからの課題であろう。

1992年度 SELDAA 定例総会の報告

1992年度 SELDAA 定例総会が、4月18日、上智会館6階で開催され、前年度活動報告の後、'91年度決算並びに、'92年度予算案が付議され、原案通り可決承認された。また、松尾教授の学事部長への異動に伴い、名誉会長に、草深新学科長が就任した。会はマケックニー神父、エバレット神父も出席されて盛大に行われた。

決算・予算に関する報告

決算・予算に関する報告1991年度決算および1992年度予算が1992年4月18日に開かれた総会において承認されました。

1991年度上智大学英語学科同窓会収支決算報告書

(単位:円)

科 目	予 算	決 算	備 考
取			
1. 前期よりの繰越し	2,360,300	2,360,300	1990年度より繰り入れ
2. 入会金	200,000	161,000	1,000円×161人
3. 会費	2,000,000	2,467,000	2,000円×1,233.5人
4. 受取利息	140,000	191,249	普通預金、郵便貯金、債券等
5. 雑収入	0	19,300	振込人不明、一時預かり等
合 計	4,700,300	5,198,849	
支			
1. 名簿作成積立金	500,000	500,000	
2. 名簿作成準備金	100,000	114,346	組み直し・編集・通信費等
3. 会報作成	400,000	333,392	会報13号、14号発行
4. 会報郵送料	600,000	494,117	会報13号、14号分
5. 会報発送料	70,000	61,734	封筒詰め、発送費
6. パーティ補助金	150,000	71,277	臨時総会後のパーティ
7. 女性セミナー	60,000	60,000	
8. 常任委員会運営費	10,000	64,381	会議費等
9. 事務処理費	350,000	313,147	封筒・振込用紙印刷等
10. BTF講座運営費	350,000	313,147	講師交通費、講義記録等
11. SELF援助金	100,000	0	
12. 講演会	50,000	0	
13. 予備費	2,110,300	236,527	故小稲先生花、ニッセル先生 最終講義・レセプション等
合 計	4,700,300	2,425,289	
差引収支		2,773,560	1992年度に繰り越し

会計監査委員石川雅弥 (40年卒) 監査済み (1992年3月31日)

1992年度上智大学英語学科同窓会予算

(単位:円)

科 目	予 算	備 考
取		
1. 前期よりの繰越し	2,773,560	1991年度より繰り入れ
2. 入 会 金	100,000	1,000円×100人
3. 会 費	2,200,000	2,000円×1,100人
4. 受 取 利 息	140,000	預貯金利息、債券
5. 雑 収 入	0	
合 計	5,213,560	
支		
1. 名簿作成積立金	500,000	平成6年度発行
2. 名簿作成準備金	10,000	
3. 会 報 作 成	400,000	15号、16号発行
4. 会 報 郵 送 料	600,000	15号、16号発行分
5. 会 報 発 送 料	170,000	15号、16号発行分
6. パーティ補助金	100,000	
7. 女性セミナー	110,000	講師への謝礼等
8. 常任委員会運営費	50,000	会議費
9. 事務処理費	350,000	封筒振込用紙印刷代、 振込手数料等
10. BTF講座運営費	200,000	講師交通費、文書費、 講義記録等
11. SELNET発足準備金	50,000	
12. 講 演 会	50,000	
13. 予 備 費	2,623,560	
合 計	5,213,560	

会費お支払いのお願い

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費で運営されています。事務局一同は、より一層の活動内容の充実と拡大を図ってゆく所存です。同窓会の円滑な運営のため、まだ会費の未納の方は、同封の振替用紙で最寄りの郵便局(青色の用紙)または銀行(赤色の用紙)より是非お支払いいただくようお願いいたします。尚、卒業年度を記入してください。卒業年がありませんと、帳簿記入の事務処理がはかどりません。

尚、今まで一度も会費をお支払いいただけていない方は、入会金も併せてお支払い願います。

入会金: 1,000円

年会費: 2,000円 (できれば3年分お願いします)

〈会費のお支払い状況〉

封筒に貼付してあります宛名ラベルの右上部をご覧ください。

朱書きの数字は、その年度分までの会費が支払われる。数字の後に(1/2)とあるのはその年度は年会費1/2(¥1,000のみ)が支払われている。

朱書きで“入”とあれば、入会金は支払われているが、1992年度分の会費が支払われていない、

「朱書きのない」のは、今まで一度も入会金も会費もお支払いいただけていないことを、それぞれ表しています。

事務局長